

巻頭言

ニューノーマル(新しい日常)における地域看護学の使命



石橋 みゆき

千葉大学大学院看護学研究科

日本地域看護学会誌, 23(3):3, 2020

ニューノーマル(新しい日常)という言葉が聞かれるようになって久しい。2020年はまさに、新型コロナウイルスの感染拡大を機に、全世界がニューノーマルについて考えた年であったといえよう。

ところで、ニューノーマルという用語は、元々ビジネスや経済学の分野において使用されてきた。2007～2008年の世界金融危機やそれに続く2008～2012年にかけての景気後退の後における金融上の状態を意味する表現である。つまり、リーマンショック後に起きた変化に対して、非日常が新しい常態になるという文脈で使われた概念であった。当時は、金融や経済に限定的に用いられていたものであったが、2020年においてはニューノーマルという用語は、日常生活のあらゆる側面で以前とは異なる(もしくは正反対の)生活様式への変化と定着といった意味合いで人々の間に浸透しているように思える。

これら感染症によってもたらされた半ば強制的な変化と新しい日常の定着は、地域看護実践の場においてもさまざまな影響を及ぼしている。そして、その変化によって、人と人との交流やつながりについてのこれまでの枠組みが大きく拡張され、持続可能な仕組みやサービスの創出がもたらされている。1つの例として、離れて暮らす老親を、近くの看護師らが訪問するサービス、「ナスくる」(<https://community-nurse.stores.jp/>)を紹介する。これは、専門のトレーニングを受けたコミュニティナースが依頼を受けて老親の自宅を訪問し、健康チェックと会話をとおして健康状態を把握し、依頼主の指定先に報告するという地域看護サービスである。たとえば、都市部で暮らす依頼者(子)は、コロナ禍においては感染拡大防止のため離れて暮らす老親を訪ねることを控えてしまう。電話やリモート帰省はあるが、実際に老親を訪ねて今の暮らしを定期的に見てくれる人がいれば安心である。「ナスくる」は、オンライン上で手続きがすべて完結する手軽さ、サービスの内容は看護師国家資格保持者監修の下で設計されるという安心感に加え、自分に代わって老親を定期的に「リアル」訪問してくれるという価値がそこにある。依頼者にはメッセージアプリで親の様子が定期的に通知され、いつでもスマホで確認できるので、遠方で暮らす老親をまるで自分の分身(アバター)が訪ねるような新たな価値をもつサービスである。現在(2020年10月)はサービス提供地域がごく一部であるが、この新しい地域看護サービスは、高齢者単独の世帯や高齢夫婦のみの世帯がますます増える日本においてニーズは高いと考えられ、新型コロナウイルスの感染が終息した後も持続するサービスであろう。

今後、新しい日常における地域看護サービスは、既存の公的なサービスと、新しく創出されたサービスとが混在し、利用者の多様なニーズに合わせて選択できる幅が拡張するであろう。そのようなときに、創出された地域看護サービスが真に人々の幸せに貢献し持続可能であるかどうか見極めるための研究もまた必要になろう。地域看護学は、人々の生活の質の向上とそれを支える健康で安全な地域社会の構築に寄与することを探求する学問である。よって、新たな価値によって生まれた地域看護サービスについて、利用者のQOLの側面からの評価や経済面からの効果、新たなサービスの価値の意味を分かりやすく説明するための研究を推進することが求められるであろう。また、地域看護学は、多様な場で生活する、様々な健康レベルにある人々を対象とし、その生活を継続的・包括的にとらえ、人々やコミュニティと協働しながら効果的な看護を探究する実践科学である¹⁾。よって、実践現場のケア提供者と共に、新たな価値によって生まれたサービスの質を向上するための取組みを推進していくこともまたニューノーマル(新しい日常)における日本地域看護学会の使命であると考えられる。

【文献】

1) 日本地域看護学会：地域看護学の再定義。 http://jachn.umin.jp/ckango_saiteigi.html (2020年10月26日)。